

創造から新天新地へー24章でたどる神の救済史

5章 「シナイ契約と神の民の召し」

出エジプト記20章

1. はじめに

- (1) 1章(創1章)では「世界の始まり」を取り上げた。
 - ①天地創造の目的は、神の国の臣民を造り出すことにあった。
- (2) 2章(創3章)では「人類の墮落と救い主の約束」を取り上げた。
 - ①悪魔は、悪魔の国を作ろうとしている。
 - ②神は、救い主の約束を与えた。
- (3) 3章(創12章)では「アブラハムの選び」を取り上げた。
 - ①救済史は、一人の人の選びから始まった。
 - ②救済史は、選ばれた系譜の歴史である。
- (4) 4章(出12章)では「イスラエル民族の始まり」を取り上げた。
 - ①ヤコブの子孫たちはエジプトで一大民族となり、そこを脱出した。
 - ②旧約最大の救いの出来事は、イエスの十字架を指し示している。
- (5) 5章(出20章)では「シナイ契約と神の民の召し」について取り上げる。
 - ①神はイスラエルの民とシナイ契約を結ばれる。
 - ②律法は救いの条件ではなく、神とともに歩むための指針である。

シナイ契約の目的は、「救われた民の生き方」を教えることである。

シナイ契約の3つのポイントを学ぶと、いかに生きるべきかが分かる。

I. 神の自己啓示

1. 出20:1~2

Exo 20:1 それから神は次のすべてのことばを告げられた。

Exo 20:2 「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、

【主】である。

(1) 律法は「救いの前提」ではなく「救いの結果」である。

①神はまず「解放者」としてご自身を啓示する。

②次に民に生き方を教える。

(2) 神との関係は「恵みに基づく契約」であり、律法はその枠組み。

①イスラエルに613の律法が与えられた。

2. 適用

(1) 私たちも恵みによって救われ、その後に「主に従う」生活へ招かれる。

①神の国の臣民になるための準備が始まる。

II. 契約の民の義務

1. 十戒(20:3~17)

(1) 十戒は二方向に整理される。

2. 第1~第4戒: 神への愛

(1) 神だけを礼拝する。

(2) 偶像を造らない。

(3) 【主】の名をみだりに唱えない。

(4) 安息日を守る。

3. 第5~第10戒: 隣人への愛

(5) 父母を敬う。

(6) 殺してはならない。

(7) 姦淫してはならない。

(8) 盗んではならない。

(9) 偽証してはならない。

(10) 貪ってはならない。

4. 適用

(1) イエスも「神を愛し、人を愛する」ことが律法全体の要約だと語られた。

①マタ 22:37~40

(2) 信仰生活は、「神への愛」「隣人への愛」という二つの方向で考えるべき。

III. シナイ契約の3つの意味

1. 贖われた民の「契約的アイデンティティ」を確立する。

(1) イスラエルは、単なる解放奴隷集団ではない。

①【主】の所有の民

②祭司の王国

③聖なる国民

(2) シナイ契約は、神の国の民の雛形を地上に可視化する役割を果たす。

2. 罪を啓示し、救済史を次の段階へ進める。

(1) 律法は、罪を取り除く力は持たない。

①律法は、罪を明らかにする(ロマ3:20、7:7)。

(2) シナイ契約は、人間の限界を暴露する。

①より深い救い(新しい契約)への必要性を浮き彫りにする。

②「律法は、キリストに導く養育係でした。」(ガラ3:24)

3. メシア到来のための「舞台装置」を整える。

(1) シナイ契約は以下の概念を可視化した。

①祭司制度—仲介者の必要性

②犠牲制度—代償的贖い

③聖所(幕屋・神殿)—礼拝の方法

④清浄・汚れの区別—罪と聖さの区別

(2) ヘブル人への手紙の教え

①これらはすべて、キリストの十字架と大祭司的働きの子型である。

(3) 新しい契約との関係

①シナイ契約:石の板、外面的規定

②新しい契約:心に書かれる律法(エレ31:31~34)

③救済史は、外的律法→内的刷新へと進展する。

(4) シナイ契約は失敗したのか。

①人間は律法を守れなかった。

②しかし律法は、その役割を果たした。

* 罪を示し、救い主を待望させ、神の義の基準を明確にした。

適用:今日の信者への適用

1. すでに救われているという自覚

(1) シナイ契約は、すでに救われた民への生活の指針である。

(2) 私たちもまた、行いによってではなく、恵みによって救われている。

(3) 信仰生活は、「義務」から始まるのではなく、「解放」から始まる。

2. 神の国の市民であるという自覚

- (1) 十戒は、神の国の価値観を地上で生きるための指針である。
- (2) 私たちは、「キリストの律法」(ガラ6:2)に従って生きる。
- (3) 聖霊によって愛の実践が可能になる。

3. キリストに望みを置いているという自覚

- (1) 律法は、私たちが義とすることはできない。
- (2) 律法が指し示していた犠牲は、十字架で完成した。
- (3) 祭司制度は、キリストの大祭司的働きによって成就した。

4. 神の救済史を生きているという自覚

- (1) 創造から始まった神のご計画は、律法を通して罪を明らかにし、キリストによって完成へと導かれ、やがて新天新地において完全に実現する。
- (2) 私たちは、その救済史の只中に生きる「神の民」として、恵みによって救われ、愛によって生きる者として歩んでいく。